Ｍｅｍｏｒｉａｌ　ａｄｄｒｅｓｓ～よみがえる「瞬間」～

広瀬亜紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｅｍｏｒｉａｌ　ａｄｄｒｅｓｓ～よみがえる「瞬間」～

【Ｎコード】
Ｎ０３７６Ａ

【作者名】
広瀬亜紀

【あらすじ】
新一が死んで、何年もの月日が流れた。大人になっても蘭は独身。そんな蘭にある日、死んだはずの新一があらわれて！？（短編「Ｍｅｍｏｒｉａｌａｄｄｒｅｓｓ」の続編です）

プロローグ

あなたのことを思うたび

あの時の楽しかった日々はもう「瞬間」ではない、「思い出」だと

思い知らされる。

それでも、ずっとあなたのこと思い続けるのは

今でも、まだ大好きだから・・・。

一瞬のうちにあなたを奪っていく「現実」は嫌いよ。

言いたかったこと、いっぱいあったのに。

「もうあなたはいない」

呪文のようにとなえると・・・

そこには・・・

あなたが・・・・・・？

第1話　「思い出」から「瞬間」へ（前書き）

短編の「Ｍｅｍｏｒｉａｌ　ａｄｄｒｅｓｓ」を先に読んで下さい！（もうプロローグ読んじゃったかもしれませんが・・・）短編を先に読んだ方がわかりやすいと思いますよ！！

第1話　「思い出」から「瞬間」へ

『　バン！！！
「新一！！」
「ら、蘭君・・もう遅すぎたようじゃ・・・」
「うそ・・・新一・・・ねぇ、目を開けて・・・・？」
「・・・・」
「・・・っ私・・・ずっと・・新一のこと・・・好きだったんだからぁ！！」』

ガバッ！！

「ハァ・・ハァ・・ハァ・・」
また、あの時の夢のせいで蘭は目を覚ました。
最近こんな夢ばかりで毎日、眠れない夜を過ごしていた。
「やだ・・・明日は引っ越しなのに・・・はやく寝なきゃ・・・」
そう言うと蘭はまた眠りについた。

～次の日～

ピンポーン・・・♪

「はーい」
「パンダ引っ越しセンターです！荷物お運びに参りました！」
「あ・・・じゃあここのダンボールからお願いします」
「はい！」
引っ越しセンターの人達は次々に荷物を運んでいった。
先月、蘭は新学期を迎えた。
そのお祝いに蘭の父・小五郎が独り暮しを許してくれたのだ。

「ありがとうございましたー！！」
引っ越しセンターの人達はあっという間に荷物を運ぶと行ってしまった。

何もない部屋にポツンと一人だけ蘭が残った。
蘭はポケットから携帯を出すと、父に電話をかけ始めた。

プルルルル・・プルルルル・・ガチャッ！！
「もしもし」
「あ・お父さん？」
「おぉ蘭か。どうした？」
「今、引っ越しが終わったとこなの。今日、何時頃帰る？」
「んー・・・わからない。まだ事件が片付いてなくて・・・。もし7時までに帰ってこなかったら電車で行ってくれないか？」
「わかった」
「じゃあ切るぞ」
「うん。じゃあね」
ブツッ・・プープープー・・・

電話は切れた。
携帯の画面には「1分27秒」と表示されている。
約1分半、用件だけ済ませた　という感じだった。

蘭の父は探偵だ。
「眠りの小五郎」という名で有名になり、今では事件に大忙しだ。
『新一も・・いつも事件、事件って言ってたなぁ・・・』
蘭は昨日のことのように楽しかった日々を思い出していた。

また一人になった蘭は買い物に出かけた。

夕飯の食材を買い、家に帰るともう6時半になっていた。
残りの30分、何をしていようかと考えていると父が帰ってきた。
「おかえりなさい」
「ただいま・・・もうクタクタだ・・・」
父はそう言うとぐったりとソファに倒れこんだ。
「もー！お父さん！？今から私の新居に連れてってくれるんでしょ！？」
「あぁ・・・わかったよ」
父は面倒くさそうな顔をしながらも部屋を出て行った。

車の中、父とは一度も言葉を交わさず、そして新居についた。

「ほぉー・・家からだいたい20分か・・・」
父はアパートを見つめながらそう言った。
「うん。案外、近いでしょ？」
「・・・まあな」
父はそう言うと車に乗り込み、エンジンをかけた。
「帰るの？車、多いから気を付けてね！」
「わかったから・・・お前こそ気をつけるんだぞ」
「はいはい！じゃあね！！」
蘭がそう言うと、父はブゥゥンと音を出して行ってしまった。
「はぁ・・・」
蘭はため息をつくとアパートの階段を上った。
そして管理人から鍵を受け取り、部屋に入った。
「わぁー・・けっこう広いし、きれーい・・・！」
これからここに住むと思うと蘭はわくわくした。
「よし！頑張って整理しよ！」
そう言うと蘭はテキパキと荷物を整理し始めた。

だいたいの物を整理すると、夕飯を食べ、そして新しいフカフカのベットで蘭は眠りについた。

～次の日～

蘭は電車に乗り、大学に向かっていた。

今、蘭は２１歳。帝丹大学の３年生だ。

先輩や同学年の人にたくさん告白されている蘭だったが、全てキッパリ断っていた。

なぜなら蘭はまだ死んでしまった新一を思い続けているからだ。

『新一・・・今、生きていたら何をしていたんだろう・・・やっぱりあの推理オタクは変わらないんだろうなぁ・・・』

そんなことを思いながら、蘭は電車を下りた。

すると、なんとなく見覚えのある顔の人が駅のホームでキョロキョロしていた。

蘭はその人が新一に見えた。

『まさか・・ね。だって新一はもういない・・・』

でもそう言い聞かせるたび、どんどんその人が新一に見えてくる。

そして蘭は思わず立ち止まり、こうつぶやいた。

「新・・・一・・・？」

その人はくるっと振り向き、蘭の方を見た。

「蘭・・・？」

その人は少しびっくりしたような顔でそう言った。

「え・・？うそ・・・新一なの・・・？本当に・・・？」

蘭は不思議そうにまたつぶやいた。

「あぁ・・・ていうかお前、俺が見えるのか？」

「見える・・・けど？」

２人とも呆然とその場に立ち尽くした。そして息ピッタリでこう叫んだ。

「えぇーっ！！」

「えぇーっ！！」
その瞬間、たくさんの人が蘭の方を見た。（実際は新一もだが）
「おいっ！？どうなってんだよ、蘭！お前、いつのまに霊感強くなったんだ！？」
「知らないわよ！そんなこと私に聞かないでよねーっ！（怒）だいたい新一も新一よ！！こんなとこフラフラと・・・あぁ気持ち悪いっっ！！」
「何ィー！！？それはこっちのセリフだ！バーロー！！」
「ちょっと新一！あんた、いいかげんに・・・」
そう言おうとした瞬間、たくさんの人が自分の方を見ているのに気付いた。
「あははははー・・・」
蘭はごまかしながらニコニコ笑うと、全速力で逃げ出した。
「おい！待てよ、蘭！！」
新一も、その後を追いかけて来た。
「新一！？何、ついて来てんのよ！」
「しょうがねぇだろ？まぁお前は普通どおりにしてろ！」
「えーっ！？」
そんなこんなで（どんなだよ・・・）蘭と新一は帝丹大学に着いた。
蘭はしょうがなく普通を装い、友達ともいつもと変わらないように接した。
（そして、新一のしつこいほどの質問攻めに疲れ果てる蘭であった・・・。）

授業も終わり、蘭は急いで誰もいない部屋に入った。
「・・・それで？」
「は？」
「は？じゃない！あんたのそのおかしな状態について質問してんのよ！！」
「おかしな状態って・・・俺みたいな霊はどこにでもいんだろ？」

「知らないわよ！霊を見るなんて生まれて初めてよ！！」
「まぁいいや・・・とにかく！俺は成仏しなきゃいけないワケ。お前の質問に付き合ってる暇はないの！」
新一はそう言うと体をクルンと宙返りさせた。
「何よ！じゃあさっさと成仏しちゃえば？私、新一になんて興味ないし！」
蘭はプイッとそっぽを向いた。
「それがさ・・・幽霊ってのは何か思い残すことがあると成仏できないんだと。それが何なのかわからないんだよなー・・・だからしたくてもできないってワケ」
「はぁ？」
「ま・そう言うこと。これからは蘭に世話になるぜ。俺の成仏のためにも協力してくれよ」
新一は軽く笑ってまた宙返りした。
「・・・なっ何言ってんのよ！うそで・・・」
「本当だよ」
新一は、また軽く笑って見せた。
その言葉を聞き、蘭は心臓が止まりそうになってしまった。

『ど・ど・どうなってるのよぉーーーーーー！！！』

第1話　「思い出」から「瞬間」へ（後書き）

★作者より★

「祝・新連載！」ということで・・・こんにちわ（＾０＾）広瀬亜紀ですっ！

今回は新一が幽霊になって登場です！

ていうかこんなにハチャメチャにする予定ではなかったんですが・・・（そしてこの連載も・・・）

なぜか「シリアス→非現実的ややコメディ小説」となってしまいました。（笑）

でも最終話ぐらいだとシリアスっていうか・・・

コメディっぽいのではなくちゃんとした感じ（どんな感じだ）になってきます！

なんか長々と書いてしまいましたね・・・。ではたくさんの感想待ってます！さようなら★

第2話　園子の秘密

ピピピピ・・・ピピピピ・・・バンッ！

「おはよう、蘭！今朝はご機嫌ななめのようで・・・」

「うるさい！！」

蘭は目覚まし時計のアラーム音と新一（幽霊）の声で目が覚めた。

「おいおい・・・何、朝から怒ってんだよ？新しいベットは寝心地が悪いのか？」

「うるっさいわねー・・・新一がいるから怒ってるのよ！！」

「はぁ？」

蘭はマジ切れ寸前だった。

なぜなら新一が、昨日からずーっと蘭にくっついているからだ。

「新一、どうしてずっとここにいるのよ！？」

「うっせぇなー・・・しょうがねぇだろ？行くあてがないんだから・・・」

「新一、幽霊なんだからどこでもいいじゃない！」

「それがさぁ・・・動けるのは米花町だけなんだよ・・・」

「なんでよ！？」

「思い残すことをやり遂げるために幽霊になってるわけだから必要以上に動くことは出来ねぇんだよ・・・」

「なら自分の家に行けばいいじゃない！」

「一人は寂しいもんなんだよ・・・お前もだろ？」

「そりゃそうだけど・・・」

新一の言葉に蘭は返す言葉をなくしてしまった。

蘭の思っている以上に幽霊たちの世界は深く、そして残酷なものだった。

思い残すことをやり遂げるまで成仏できないことや

一定の場所にしか存在できないことを蘭は悲しく思った。

「新一・・・辛いんだね・・・」
「・・・そんな悲しそうな顔すんなよ！俺は大丈夫だから。な？」
「うん・・・」
蘭はあの頃と変わらない頼りになる優しい新一を見つめながらそう言った。
「・・・蘭？どうした？」
「え？あぁ、ごめん。なんでもないの！」
蘭はそう言うと明るく笑ってみせた。
「ふーん？・・・てかもう時間じゃねぇの？大丈夫か？」
「えっ！？」
蘭は新一にそう言われ、あわてて時計を見た。
「いやぁーっ！遅刻ーー！！」
「バーロ・・・」
新一はそんな蘭を見てボソッとつぶやくと安心したように微笑んだ。

～帝丹大学～
「・・・ギリギリセーフ」
「わっ！！」
「きゃあっっっ！！」
蘭はいきなり誰かに目隠しされた。
「だーれだ？」
「・・・（ブチッ）園子ぉー？？」（↑変な音がした・・・？）
「よく分かったわねぇー！おはよっ！！」
「おはよう・・・」
蘭は今にも死にそうな声でそう言った。
「元気ないじゃない？彼氏と喧嘩でもしたのぉ？」
「は！？」
「何！？」
園子の言葉に新一まで叫び声をあげた。

「ちょっと園子！！いいかげんにそう言うのやめてよね！！」
「いいじゃん、別に～♪」
「おっおい！どういいうことだよ？教えろよ！」
だが、新一は幽霊なので園子に聞こえるはずがないのだ・・・・・・が！！
「ん？蘭、何か言った？」
「えっ！？なっ何も言ってないけど？」
「・・・？おかしーな・・・なんか聞こえた感じがしたんだけど・・・」
「空耳よ！空耳っ！！」
蘭は焦って、ごまかした。（新一は「いいじゃねぇか」などと言っていたが・・・）

だがその時、蘭と新一は園子の意外な秘密を知らなかったのだ。

家に帰ると蘭は新一に忠告した。
「新一！園子にバレたら厄介なことになりそうだから、なるべく喋らないでね！！」
「なんで？別にいいじゃん」
「ダメ！園子のことだもん、バレたら絶対からかってくる！」
「あっそ。・・・それよりお前、彼氏なんていんの？」
「何よ、新一・・・まだ気にしてるの？ウソだってば・・・」
「いいから教えろ！」
新一はいきなり蘭の目の前まで顔を近付けてきた。
蘭はびっくりして顔を真っ赤にさせ、ボソボソとこう言った。
「男友達よ・・・ちょっと気が合うってだけ！」
「名前は！？」
新一はさらにしつこく質問した。
「・・・松本広樹」
「歳は！？」

「・・・21歳」
「タメじゃねぇか・・・顔はどんな感じ!?」
「・・・」
蘭はいきなり無言になり、そして下を向いた。
「蘭?聞こえなかったのか?顔はどんな感じ・・・」
「うるさいっっ!もういいでしょ!?しつこいのよ、バカ!」
「何いきなりキレてんだよ・・・ったく」
「もうどっか行って!」
「はいはい」
『あれ・・・?怒らない?しかも素直?』
蘭の思ったとおり、新一はその日めずらしく素直だった。

~次の日~
蘭と園子は昼食を食べるため、バイキングの店に入った。
「おぉーっ!うまそー!!」
新一が声を出したので、蘭はキッと新一を睨んだ。
すると新一はちょっと顔をしかめて口を閉じた。
「ここってポテトサラダがおいしいのよねーっ!私、いっぱい食べちゃおvv」
「そうなの?じゃ私も!」
蘭と園子は皿にたくさんポテトサラダを盛り付けた。

好きな食べ物を盛り終わると2人はテーブルに座り、食べ始めた。
すると突然、園子が話し始めた。
「ねぇ・・・蘭」
「ん?何?」
「ずっと思ってたんだけど・・・その・・・言ってもいい?」
「え?いいよ、別に・・・」
園子が改まって言うので蘭は首をかしげた。
「ショックを受けるかもしれないんだけど・・・」

「うん・・・？」
蘭はなんとなく嫌な予感がした。
「蘭に・・・霊が・・・憑いてるかもしれないの・・・」
「え？」
「だから・・・」
「園子、霊感があるの！？霊が見えるの！？」
蘭は驚いて、思わず立ち上がった。
「ううん・・・実際に見えるわけじゃないのよ？でも・・・なんか、霊が近くにいるとわかっちゃうのよね・・・」
「は・初耳なんだけど・・・」
園子の言葉に蘭は目を丸くした。
「大学に入ってからわかるようになったのよ。それにこんなこと怖くて誰にも言えないじゃない・・・」
「そう・・・だよね」
蘭はそう言いながらゆっくりと席に座った。
そして、なんとなく新一を見ると新一も驚いて口をポカーンを開けていた。
そんな新一を見て蘭は思わずプッと笑ってしまった。
「・・・！？ちょっ・・・蘭！人が真剣に話してるのに！！」
「ストップ！ちがうの、私もなの！今、霊が口をポカーンと開けて園子の話に驚いてるから笑っちゃったのよ！」
蘭がそう言った途端、新一はハッと我に返ったようで慌てて口を閉じていた。
「えぇ！？」
そんなこととは知らずに園子はかなり驚いていた。
「それこそ初耳よ！！どういうこと！？」
「それがなんでかわからないの。でも今のオバカな幽霊さんしか見えないんだけどね。しかも見えるようになったのは一昨日よ」
「一昨日・・・！？」
園子が驚くとなりではバカと言われて怒る新一がいた。

それから蘭はその幽霊が新一だということや成仏の話など全て園子に教えた。

「わかったわ。そういうことなら私も協力する」

「本当！？ありがとう、園子！！」

「サンキュ」

新一も照れたようにそう言っていた。

こうして新一と蘭に園子という協力者が加わった。

だが、この物語は前途多難。まだまだ数々の事件が待ち構えているのだった。

第2話　園子の秘密　（後書き）

～作者より～

園子ちゃんが加わりましたねー♪

でも本当に前途多難。まだまだ事件が待っているのです・・・！！

ここまで読んでくださった方は本当にありがとうございます！

ぜひぜひ最後までお付き合い下さい★

では感想まってます！さようならーーー（＾０＾）

第3話　気になるあなたと気になるアナタ

「幽霊・・・霊感・・・心霊現象・・・」
「おい、蘭。みんなこっち見てるんだけど・・・」
「大丈夫、大丈夫・・・よしっ！これだけあれば役に立つでしょ！」
「・・・たぶん」
「じゃあ借りてくるねっっ」

園子が加わったその次の日、蘭と新一は図書館を訪れていた。
全て霊に関する本ばかりだ。

「ふぅー・・・じゃあ帰ろっか」
「おぉ。本、重くねぇか？」
「だてに空手部女主将やってんじゃないのよ！これくらい平気！」
「ならいいけどよ」

そう言いながらもヨタヨタと
危なっかしい様子で歩く蘭に助けようと手を出すが
ハッと気付いて、その手を止める。

『自分は幽霊、魂だけの存在』

認めたくないが、それが現実。
わかっているつもりでも、やはり辛い。

そんなことを思いながら、のろのろと歩いていると
蘭が不思議そうに振り向いた。
「・・・新一？何やってんのよ！早く！」
「あぁ・・・って蘭！前、危ない！！」

「え？」

ドンッ！！ドサドサー！！！

新一が言ったときにはもう遅かった。
蘭と誰かが、ぶつかってしまったのだ。

「わーっ！すみません！！怪我ありませんか！？」
「えぇ・・・私こそすみません・・・ってあーっ！！」
「おぉ！！なんだ、蘭だったのか。心配して損した！」
「何よそれ！私も広樹なんかに謝っちゃってバカみたい！」
「はぁ！？・・・ってまぁいいや、また喧嘩になるからな。そんなことより本拾わなきゃ」
「喧嘩になるって・・・広樹が変なことばっかり言うから・・・」
「わかったから拾えって」

そう言いながら眼鏡の男は本を拾い始めた。
新一は蘭に近付き、早口で例の質問攻めをし始めた。

「おい！コイツ誰だよ！？」
「この前話したでしょ！気の合う友達よ！」
「そんなこと聞いてんじゃねーよ！名前は！？な・ま・え！」
「それもこの前話したじゃない！松本広樹！！」
「・・・蘭？何1人で喋ってんの？」
「え！？きっ気のせいよ！」
「いや・・・どう考えても喋ってただろ」
「そっそれは明日話すから！じゃあね！！」

蘭はそう言うと本を抱えて逃げていった。

～蘭の家～
「しーんーいーちー・・・（怒）」
家に帰るなり、蘭はいきなり怒り出した。

「もーっ！あれだけ人前で喋るの禁止って言ったじゃない！」
「それは園子の前だけだろ！？」
「そんなの誰でも同じよ！」
「別にいいじゃん！全然バレてなかったって！」
「バレバレよ！新一のせいで明日話すって言っちゃったじゃない！！」
「それは蘭が悪いんだろ！？適当にごまかせばいいじゃん！」
「あーあ・・・明日どうしよー・・・」

そう言いながら明日がこないでほしいと
願う蘭だったがあっというまに次の日になってしまうのであった。

～帝丹大学～
「おはよ！蘭！」
蘭はその声にビクッとして恐る恐る振り向いた。
「・・・なんだ、園子か。おはよう」
「なんだとは失礼ねー・・・どうしたの？何かあった？」
「んー・・・ちょっとね」
「何よ！この園子様に言えない秘密でもあるって言うの！？」
「・・・実は・・・」

そう言って蘭は園子に事情を話し始めた。

「そんなの適当にごまかしちゃいなさいよ！」
「えー・・・でも信じるかなぁ」
「大丈夫よ！それより新一君と広樹君ってなんか似てるわよね！そ

う思わない？」
「あぁ！言われてみればそうかも！新一が眼鏡かけたって感じ！」
「そうそう！やっぱ蘭ってあぁいう感じがタイプなのねー！」
「なっ！まだ好きと決まったわけじゃないでしょ／／／／とにかく！うまい言い訳考えなきゃ！」
「（話そらしたわね）はいはい！」

そしてあっというまにお昼の時間。
今日はお弁当を持ってきたため大学で食べることにした。
すると昨日の広樹が蘭に話しかけてきた。

「蘭！昼メシ一緒に食わない！？」
「（きた！）いいよ」
「ところでさ！いきなりだけど昨日のアレなんだったの？」
「あれはー・・・ただのまちがいよ！」
「まちがい？ふーん・・・そっか！ならよかった！」
「（やった！）なんで？」
「だって独り言とかだったら超変人だぞ！？まちがいなら安心！」
「あははー・・・そうだよね！（独り言って言わなくてよかったー・・・）」

こうして新一のことがバレることなく無事に一日が終わったのだった。

～その夜～
「ほーら！やっぱり大丈夫だっただろ？」
「まぁね・・・でも広樹が単純な人だったからうまくいったようなもんよ・・・」
「・・・確かにな」

次の日、朝一番に園子が話しかけてきた。
「蘭ァーん！おはよ！昨日、どうだった？広樹君のこと、うまく騙せた！？」
「ちょっと園子！あんまり大声で話さないでよ！他の人に聞こえちゃうじゃない！」
「・・・誰をうまく騙せたって？」
「「！！！」」

あまりに突然、本人が現れたので蘭も園子もびっくりしてしまった。

「広樹！」
「どーいうことだよ！蘭！！」
「別に・・・」
「やっぱり嘘だったのか！？本当のこと言えよ！」
「わ、わかったからあんまり怒らないで～・・・」

広樹が気付いた時にはみんながジロジロとこちらを見ていた。
そして慌てるように「ちょっと来て！」と言うと蘭を連れてどこかへ行ってしまった。

誰もいない教室に連れられた蘭はしょうがなく、本当のことを話し始めた。

「なんだ・・・別に隠すほどのことじゃないじゃん！」
意外にも広樹はあまり驚いていない様子で逆に平然としていた。
「そうかな・・・」
「そうだよ！それになんか困ったことがあったら俺に言えって！」
「うん・・・ありがと」

その時、蘭は自然に顔が赤くなっていた。

まるで好きな人と話しているように。

初めて見た広樹の優しい笑顔。

蘭の中で広樹に対する気持ちが変わり始めていた・・・。

第3話　気になるあなたと気になるアナタ（後書き）

★作者より★

はい！蘭ちゃんの大学の友達・松本広樹君が登場です！

本文を見てわかるように広樹君は「新一が眼鏡をかけた」みたいな顔をしています！

簡単に言えばコナン君の大学生バージョンですねｗｗ

性格も「明るくて、元気で、愛想がいい」みたいな感じにしました。

誰にでも好かれやすいタイプです♪

こんな広樹君をよろしくお願いいたします！！

第４話　事件発生

７月２８日、木曜日。
この前、始まったばかりの夏休みも今日で４日目だ。
わずかに開けた窓からリーン、リーンと虫達の鳴き声が聞こえる。

「これでよし！」
その言葉と同時に蘭は大きな鞄をバンと叩いた。
「・・・何ソレ（修学旅行でも行くのか、コイツ）」
「明日のキャンプの持ち物！お菓子にー、花火にー・・・」
「は？」
嬉しそうに説明し始める蘭の言葉をさえぎり、裏返ったような声で新一は言った。
「ああ、そっか。新一に言ってなかったっけ？」
蘭はそう言うと部屋を出ていった。

しばらくするとチラシのような紙を手にやってきた。

「ココ！ほら、すっごくキレイでしょ？園子と広樹と私の３人で・・・」
「俺は？」
「え？」
「俺は？って聞いてんの」
「だって新一、明日はお父さんの仕事についていくって言ってたじゃない。それに米花町の中でしか動けないんでしょ？」
「あー・・・うん。まぁ、そうだな」
蘭に言われてようやく自分が行かない（行けない）理由を思い出した。
明日は蘭の父さんの仕事についていく予定だったのだ。

「どうかした？」
「へ？・・・別に」
「そう。じゃあ私、朝早いから寝るね。おやすみ」
「おやすみ・・・」

～次の日～

ピンポーン

「あっ来た！」
「蘭ァーん！準備出来た！？行くわよー！」
「はーい！じゃあね、新一」
「おう」
こうして蘭はキャンプ場へと出かけて行った。
新一も蘭の父がいる「毛利探偵事務所」へ向かった。

「すっごく楽しみ！キャンプなんて初めて！」
「私は家族で何回か行ったことある」
「俺は今回で2回目。ガキのときに1回行ったっきり」
車の中では会話が絶えなかった。
みんな今日の日を楽しみにしていたのだ。
天気も昨日まで雨だったのに今日は雲一つなく、晴々としている。

「さあ、着いた！」
キャンプ場は緑がいっぱいで、とてもきれいだ。
「すごーい！」
「テント張ったら釣りに行こう！今夜のおかずだ！」

「「うん！」」

それから3人は手分けして2つのテントを張った。

「「「出来たー！」」」

「私達ってば、なかなか上手いじゃない？」

「そうだね（笑）」

「じゃあ釣りに行こうぜ！俺は竿借りてくるから！」

広樹は走って、竿を借りに行った。

「蘭、今日するんでしょ？」

「・・・何を？」

「馬鹿ね、告白に決まってんでしょ！こ・く・は・く！！」

「はァ！？何言ってんのよ！絶対しません！」

「えー！？つまんないじゃない！」

「何と言われようが絶対に告白なんてしません！」

しばらくすると、広樹が戻ってきた。

「借りてきた！！」

広樹はそう言いながら蘭と園子に竿を渡した。

3人は湖へ移動した。

「本当に釣れるんでしょうね？」

園子は不安げに湖を見つめた。

「大丈夫だよ、ここは管理釣り場だから。絶対に何か釣れるって」

「ふーん・・・」

広樹は竿に餌を取り付けると湖の中へ投げ込んだ。

「へぇー！案外カッコイイじゃない！」

「案外ってなんだよ！」

「あはは、こりゃ失敬！」
園子は笑いながら額をペシリと叩いた。

「じゃあ2人とも餌つけて。今みたいにすればいいから」
「えー！！このミミズ触るの！？」
蘭が叫んだ。
「蘭は虫がダメなのよ」
「しょうがねぇなー・・・。じゃあ俺がつけるよ」
広樹は蘭の竿を奪って、器用に餌を取り付けた。

こうして、みんな釣りをし始めた。

広樹は短時間でたくさんの魚を釣った。
だが、蘭と園子はなかなか釣ることができない。
「釣りってけっこう難しいね」
「本当・・・って蘭！竿、動いてる！」
「うそ！？」
慌てて蘭は竿を引っ張った。
だが、かなり力が強くてそう簡単には引き上げられない。
「蘭、ゆっくり！ゆっくり！」
「ゆっくりって言ったってーーー」
「あー、もう！」
蘭を見かねて広樹も加わった。
「「んーーー！！！」」
2人で力いっぱい竿を引き上げると
バシャッという水飛沫とともに魚が水面から顔を出した。
その魚はとても大きく、陸の上でビチビチと元気よく跳ねている。
「やったじゃない！蘭！！」

「うん！嬉しい！」
「俺、こんなでっかいの初めて見たよ！！」
こうして計１０匹もの魚が釣れ、３人はテントへと戻った。

「おっと、これは警部殿！ご無沙汰ですな！！」
「まーた君が第一発見者か（まったく事件の疫病神が・・・）」
「（ハハハ・・・さすがおっちゃん）」
新一は蘭の父・小五郎と偶然にも殺人事件に遭遇していた。

殺されたのは小五郎が依頼を受けていた人物で
たまたま今日家へ訪れると、なんと殺されてしまっていたのだ。
「奥さんの証言からすると、おそらく死亡推定時刻は今日の午後１時・・・」
新一は刑事たちの声に耳を傾けていた。

「なんかまだ４時なのに薄暗いわね・・・」
「そろそろ夕食の準備する？」
「そうね。いつもと違って時間かかるし・・・」
そう言って蘭と園子は森の中へ薪を取りに行った。

「森の中はもっと暗いから、気をつけろよ！」
広樹がそう叫んだが２人の耳には届いていなかった。

「何これ・・・こんなに暗かったっけ？」
「真っ暗で何も見えない・・・薪どころじゃないよ」
「やっぱり戻らない？」
「うん、戻ろ」
2人はテントへ戻ろうと振り向いた。
だが真っ暗でどちらに行けばいいのかわからない。
「う・・・そ」
「どうしよう・・・帰り道わかんないよ・・・」
「もしかして私達・・・迷った？」
園子が不安そうに呟いた。
「まさか・・そんなに歩いたわけじゃないし・・・こっち行ってみよ！」
「待って！下手に動いて本当に迷ったらどうするの！？」
「そ、そうだよね・・・」
辺りはさらに暗くなり、お互いの位置さえもわからなくなってきた。
どうすればいいのかわからないまま、時は虚しく過ぎていく。

『どうしよう・・・！？』

第４話　事件発生（後書き）

☆作者より☆

「新一くんの恋人」同様、こちらもかなり更新が遅れてしまいました。

嗚呼・・・本当にごめんなさい・・・。

どうか許して下さい・・・。

てかもう４月なんですね（今日は４月１日）

４月１日といえばエイプリルフール！年に一度の嘘をついてもいい日です！！

私はさっそく友達から騙されました。。。（↑バカ

疑問なんですけど嘘なんていつでもついちゃうのに、

あえて“嘘ついてもいい日”だなんて、おかしいと思いません？

だからこれからは“嘘ついちゃダメな日”にすればいいと思います（笑

・・・なーんてこんな馬鹿話、どうでもいいですよね（＾＾；

でぁ感想待ってます！！

さようなら＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0376a/

Ｍｅｍｏｒｉａｌ　ａｄｄｒｅｓｓ～よみがえる「瞬間」～

2010年11月25日02時35分発行